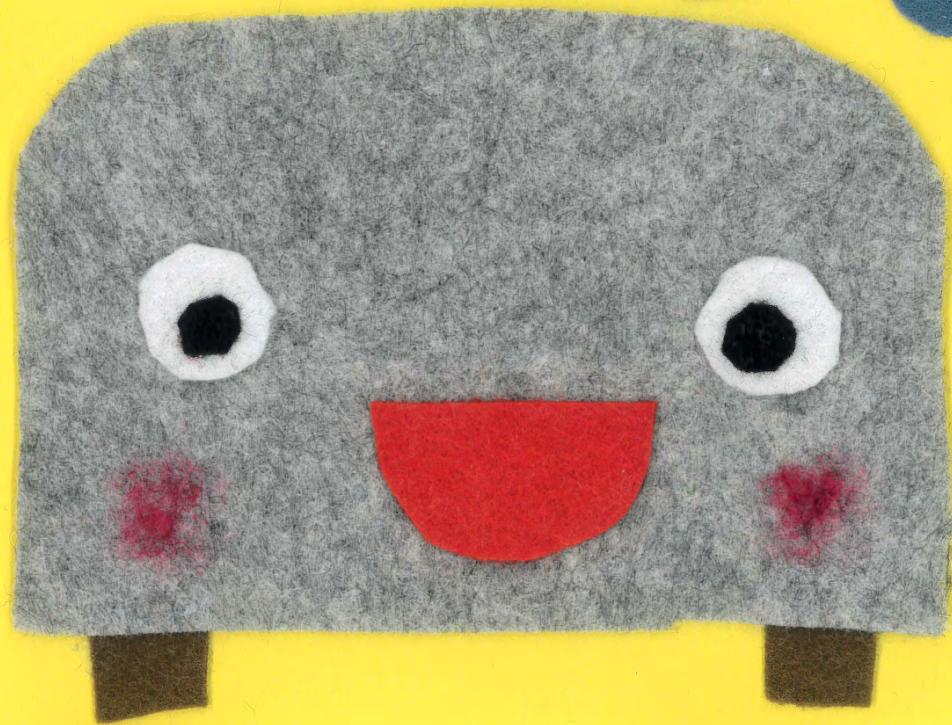
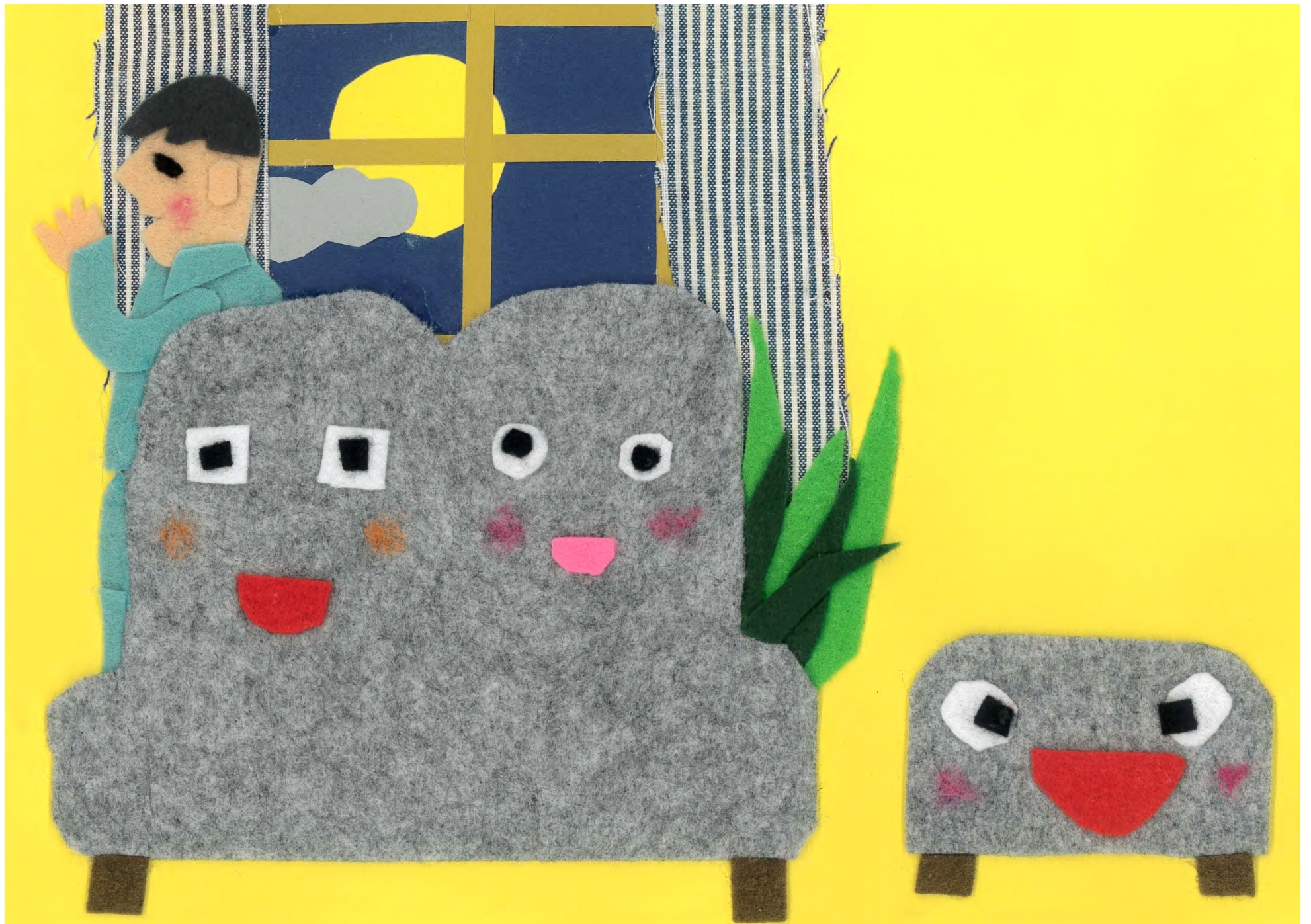


オットマン
とまちゃん





このおうちのご主人は、若いだんなさまとおくさま。

居間にはソファのお父さんとお母さん、

一人息子のオットマンのとまちゃんがいるよ。

オットマンは、ソファの前に置いて使う足乗せ用ソファなんだ。

とまちゃんは、元気いっぱいの5才の男の子。

夜も更けてきたので、だんなさまとおくさまはお休みだよ。



あれあれ。ロボットクリーナーが動き出したよ。

だんなさまが昼間買ってきて、

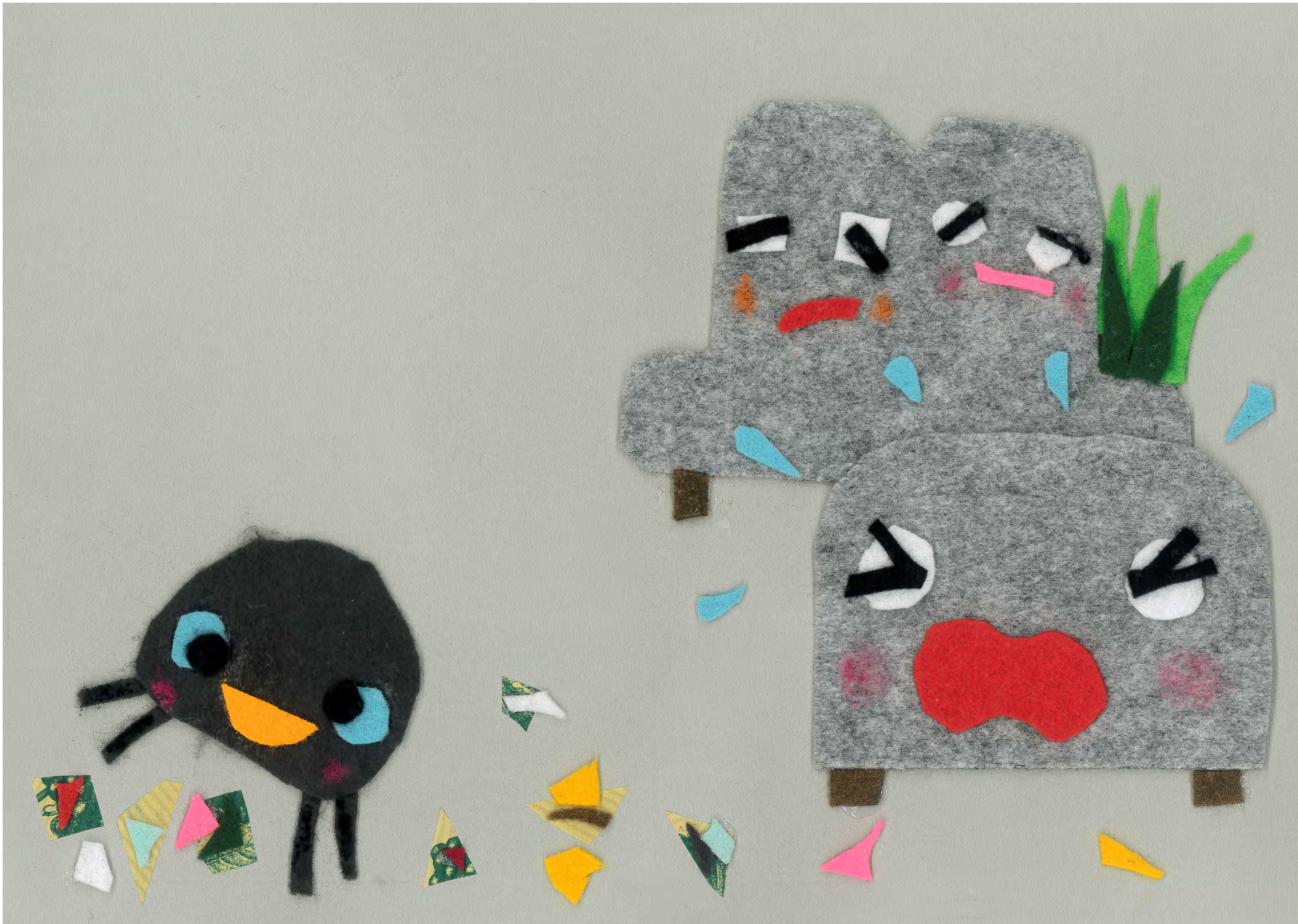
時間をセットしておいたので動き出したみたい。

部屋の中をあちこち、くるくる動き回って、

細かいゴミを吸い込んでいる。

「くるくる、すうすう、くるくる、すう。」

「くるくる、すうすう、くるくる、すう。」



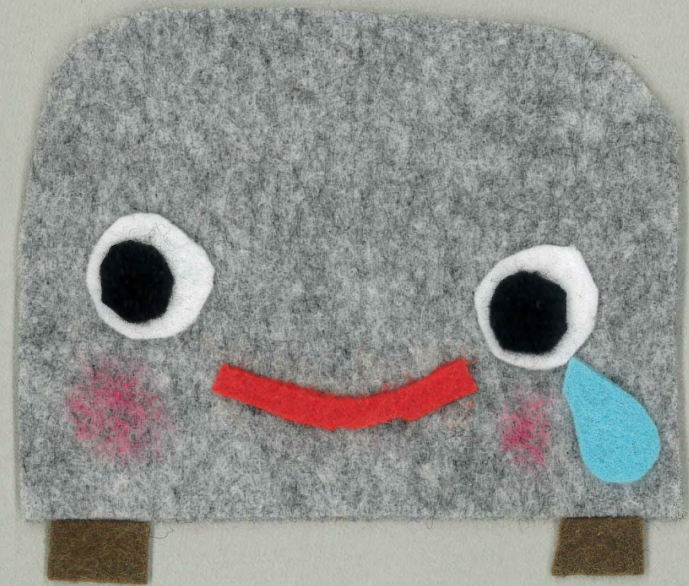
とまちゃんは、ロボットクリーナーが
うらやましくてたまらない。

「ぼくもあんなふう^{うご}に動きたいよ。

くるくる、すうすうしたいよ。えーん。」

とまちゃんはだだ^{はじ}をこね始めた。

お父さん^{とう}とお母さん^{かあ}ソファは、困^{こま}ってしまった。



とまちゃんが泣き疲れてうとうとしていると、
まど そと つきさま い
窓の外のお月様が言ったんだ。

「とまちゃん、そんなに動きたいのなら、
こんや まほう ちから うご
今夜だけ魔法の力で動けるようにしてあげるよ。
いえ なか
でも家の中だけだよ。
そと で
外に出てはいけないよ。」

とまちゃんは、うれしくてこう言ったんだ。
つきさま やくそく まも
「お月様、ありがとう。約束は守るよ。」



ソファのお父^{とう}さんとお母^{かあ}さんはぐっすり眠^{ねむ}っている。

うご
動^{うご}けるようになったとまちゃんは、

ロボットクリーナーの^{あと}後^{まわ}をついて回^{まわ}り、

^{へや}部屋^{なか}の中^{うご}をくるくる動^{まわ}き回^{まわ}っている。

^{あそ}しばらく遊^{あそ}んでいると、

^{おな}「同^{ところ}じ所^{うご}だけ動^{うご}いてもつま^{あそ}まない。

も^{ところ}っといろんな所^{あそ}へ行^{あそ}って遊^{あそ}びたい。」

^いと^だ言い出^{あそ}したんだ。

ロボットクリーナーが^と留^きめるのも聞^{あそ}かず、

とま^{そと}ちゃんは外^{あそ}へ遊^いびに行^{あそ}ってしまった。



いえ そと せかい ひろ かぜ ふ き も
家の外の世界は広くて、風が吹いて、とても気持ちがいい。

よる かなん はな かお
夜だけど、花壇の花がとてもきれいで、いい香りもする。

とまちゃんは、わくわくしてどんどん遠くへ行っちゃった。

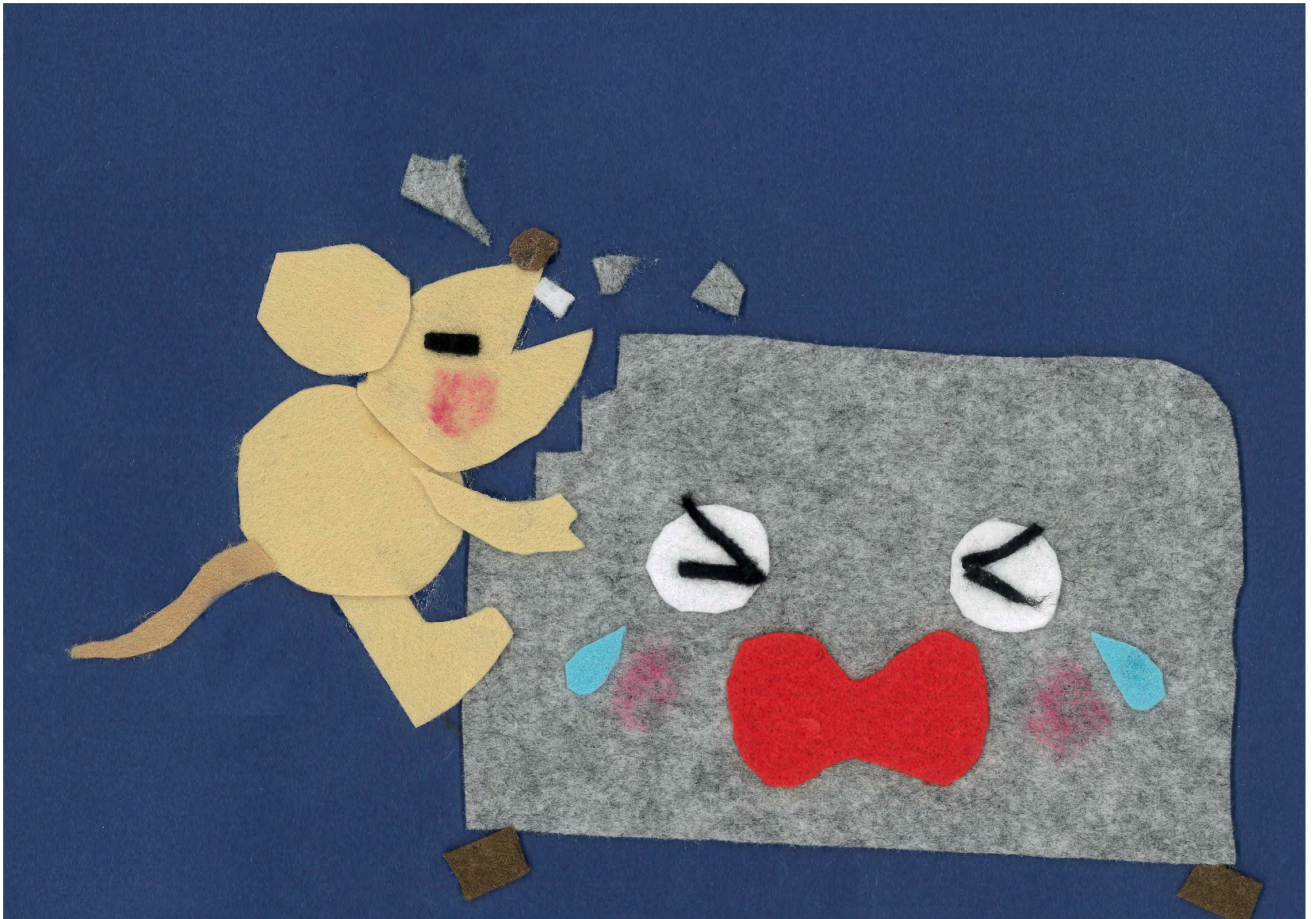
しばらくすると、「ぽつぽつ、ぽつぽつ。」

そのうちに「ざーざー、ざーざー。」と雨が降ってきた。

つきさま み
お月様が見えなくなった。

「わーい、雨だ、雨だ！」初めて雨を見たとまちゃんは大喜び。

でも、びしょぬれ。



「かさかさ、かさかさ。」

なにかちい小さない生き物ものがとまちゃんちかに近づいてきた。

のねずみだ。

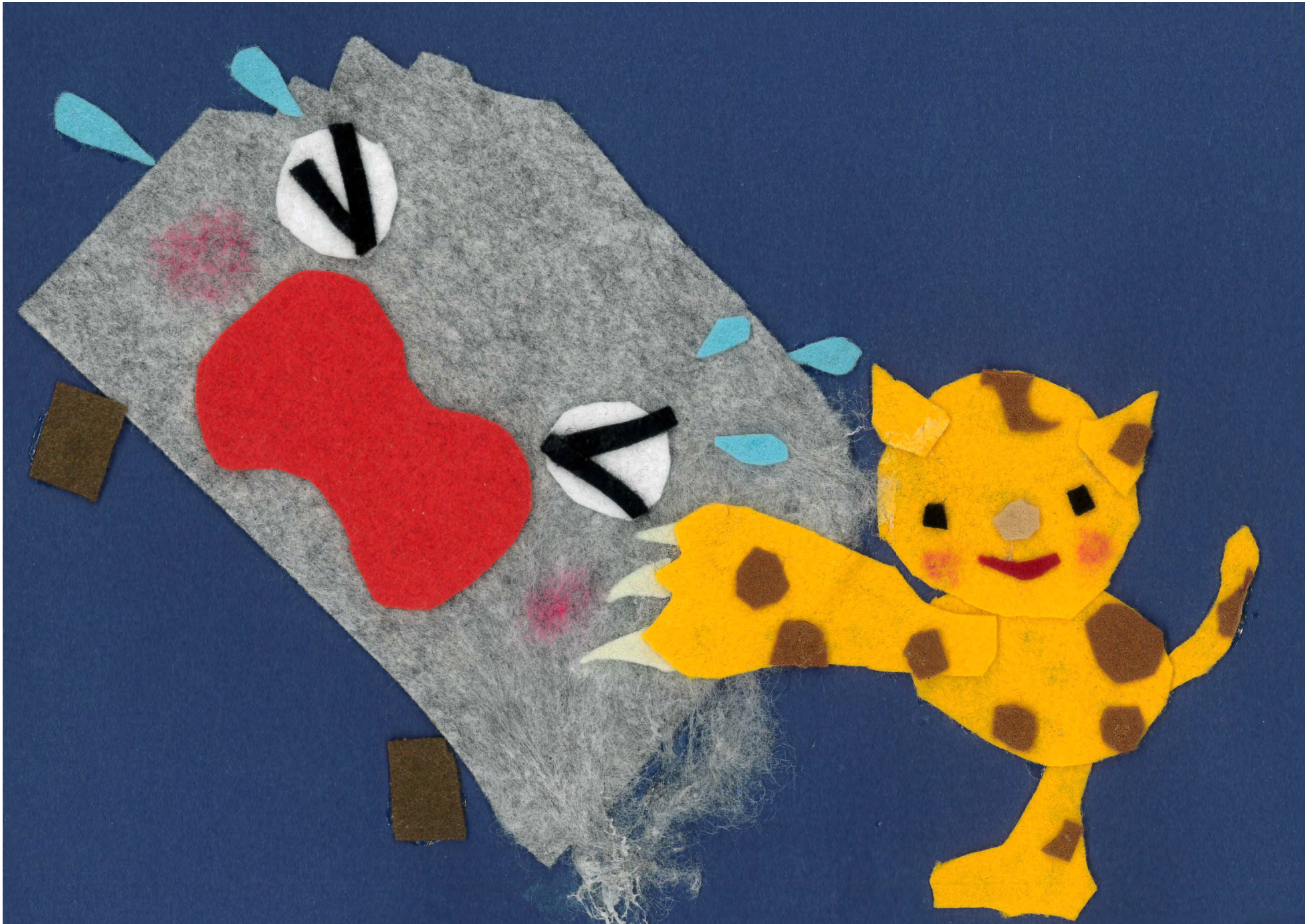
「へんなやつがいるぞ。ちょうどいい。

ぼくまえの前歯のが伸びすぎたから、こいつをかじっちゃおう。」

「かりかりかり、かりかりかり。」

「いたい、いたい。やめて、やめて。」

するといのねずみは、つまんなくなっ行ってしまった。



ネズミにかじられたとまちゃん。^{いた}痛くて^な泣いている。

「がさがさ、がさがさ。」

なにか^{おお}ちょっと^い大きな^{もの}生き物がとまちゃんに^{ちか}近づいてきた。

のらねこだ。

「へんなやつがいるぞ。ちょうどいい。

ぼくの^{まえあし}前足の^のツメが伸びすぎたから、つめとぎをしよう。」

「がりがりがり、がりがりがり。」

「いたい、いたい、いたい。やめて、やめて、やめて。」

すると^いのらねこは、つまんなくなっ行ってしまった。



あめ め
雨に濡れたとまちゃん。

さむ
とても寒くなってきた。

ネズミにかじられたとまちゃん。

のらねこにつめとぎされたとまちゃん。

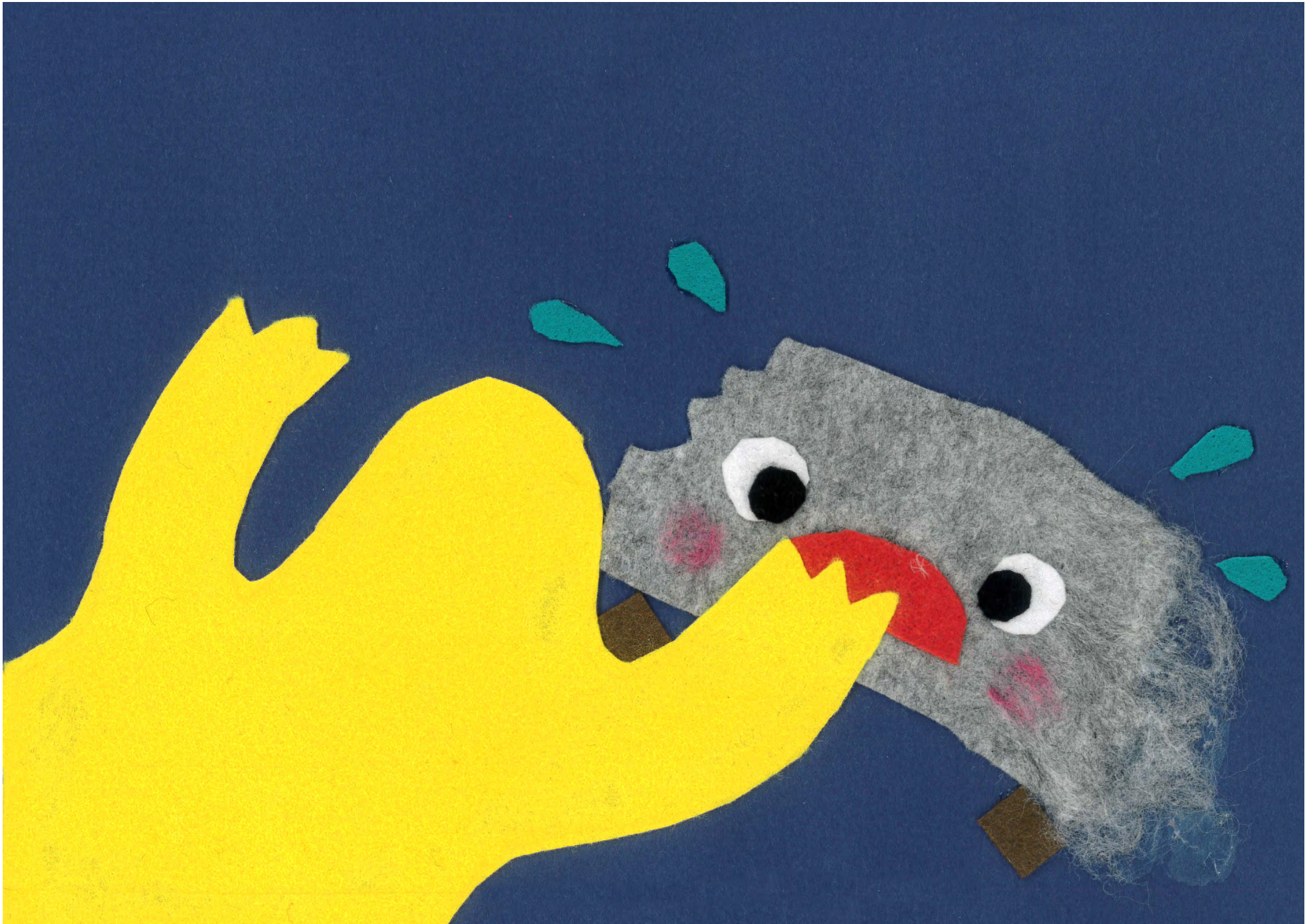
いた なみだ
とても痛くて涙がぽろぽろ。

とまちゃんは、あたた とう かあ
暖かいおうちやお父さん、お母さんソファを

おも だ な だ
思い出し、泣き出した…………。

さむ いた かえ
「寒いよ、痛いよ、おうちへ帰りたいよ……。」

とう かあ
お父さん、お母さん……。」



その時、とつぜん黄色い影がとまちゃんの前にさっと現れた。

「わわわわ。こわいよう。助けて……。」

びっくりしてこわがっているとまちゃんに、

黄色い大きな手がぬっと伸びてきた。

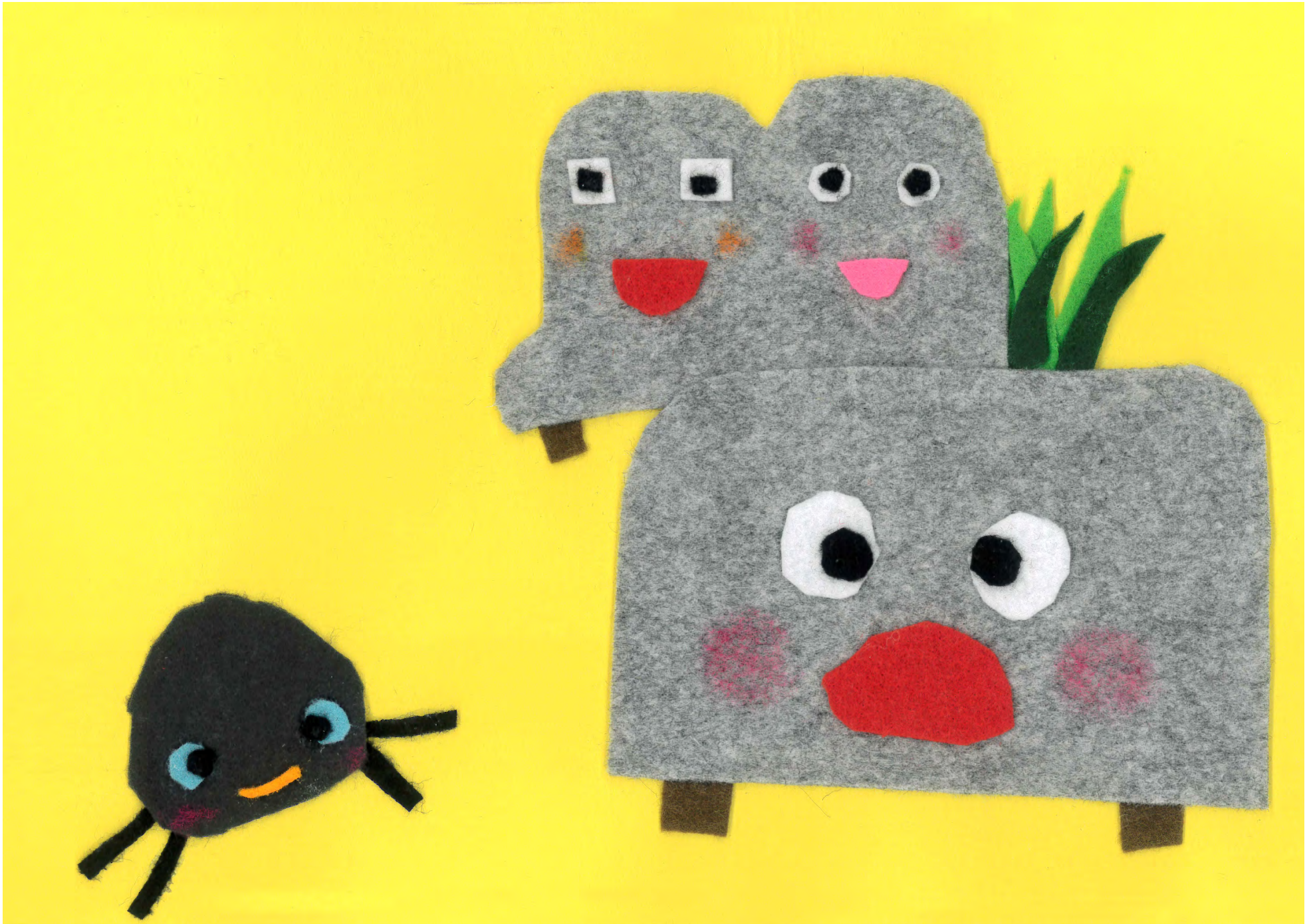
とまちゃんはあまりのこわさに気を失ってしまった。



それからどのくらいの^{じかん}時間がたったのだろう……。

^{あさ}
朝になった。

だんなさまとおくさまは、^{しごと} ^で仕事に出かけた。



ここは居間。^{いま}

おや、とまちゃんが目^めを覚^さました。

「おはよう、とまちゃん。」

「おはよう、お父^{とう}さん、お母^{かあ}さん。」

ぼく、どうしてここにいるの？

あれ、どこもぬれてないし、痛^{いた}くない……。変^{へん}だなあ……。」



「夕^{ゆう}べのことは夢^{ゆめ}だったのかな。

あの黄^{きいろ}色いかげは、すごくすごくこわかった……。

ふしぎな夢^{ゆめ}だったな……。」



すると、そばにいたロボットクリーナーが言ったんだ。

「お帰りなさい、とまちゃん。いろんなことがあったね。

たの^{たの}楽しくて、こわくて、痛い^{いた}夢^{ゆめ}だったみたいだね。

やっぱりとまちゃんがここにいると、

みんながとても幸せな^{しあわ}気持ち^{きも}になるよ。」



それからとまちゃんは、ソファのお父^{とう}さん、お母^{かあ}さん、
そして、だんなさまやおくさまといっしょに^{たの}楽しく
暮^くらしたんだ。

ふつうに暮^くらせることがとても^{しあわ}幸せ…………。

もちろん、とまちゃんがロボットクリーナーを
うらやましがることはなくなったよ。

NOYES
SOFA 100%

2020年2月22日発行

著者 ドングリマン

発行者 株式会社 NOYES

第8回 NOYES 絵本コンクール ZIP 賞作品